

東叡山 寛永寺

歴史

寛永寺は元和八年(1622)、徳川二代將軍秀忠公と天海大僧正により、徳川將軍家の祈願寺として創建が決められた寺院で、その三年後三代將軍家光公の寛永二年(1625)十月に正式に発足しました。

山号の東叡山とは東の比叡山の意味で、寺号も延暦寺に倣い年号を用いたのをはじめ、その後の造営も比叡山延暦寺に倣って行われています。

当初、寺領二千百石、寺域十七万坪程で発足した當山は次第に整備され、中でも現在のの上野公園中央噴水の地に五代將軍綱吉公が建立した根本中堂は、間口45.5m、奥行42m、高さが32m程の大伽藍で、まさに江戸随一の建物でした。

八代將軍吉宗公の時代には堂塔伽藍三十余棟(歴代將軍靈廟を除く)、子院三十六坊、境内地三万五千坪余、寺領一万一千七百石余に及び、文字通り日本を代表する大寺院になりました。

一方、第三世(守澄法親王)からは天皇家より皇子を迎え、以来幕末まで山主は輪王寺宮(一品法親王)によって承継がされました。輪王寺宮は東叡・比叡・日光の三山の山主を兼帯し、その存在によって、寛永寺は天台宗の実質上の本山となるばかりでなく、広くわが国宗教界全体の上に立つ存在となりました。

寛永寺根本中堂

元禄十一年(1698)に建立された当初の根本中堂は、慶応四年(1868)彰義隊の戦争の際に焼失してしまいました。

現在の根本中堂は、明治二年に川越喜多院の本地堂(寛永五年(1638)三代將軍家光公が建立)を山内子院の大慈院(現寛永寺)の地に移築し、彰義隊の戦争で焼失を免れた寛永寺の本地堂の用材も加え、再建されました。

正面にかかる「瑠璃殿」(東山天皇御宸筆)の勅額や、境内の二つの大水盤は戦火を免れ、創建当時の面影を今日まで伝えています。

また境内には、四代將軍家綱公御靈廟の梵鐘や、當山中興の学僧・慈海僧正の墓、わが国最初の講義を伴う公開図書館「勸学寮」を設立した名僧・了翁禪師の塔碑や坐像その他、虫塚など多数の史跡があります。



開山堂(両大師)



開山堂は、東叡山の開山である慈眼大師天海大僧正をお祀りしているお堂です。天海大僧正が尊崇していた慈恵大師良源大僧正もお祀りしているところから、一般に「両大師」と呼ばれ、庶民に信仰されてきました。創建は正保元年(1644)ですが、たびたび火災に遭い、現在のお堂は平成五年に再建されたものです。

慈恵大師は正月三日に亡くなったところから元三大師とも呼ばれ、靈力で疫病を退散させたところから厄除け大師として広く信仰を集めています。慈眼大師は法力に優れ、また一〇八歳の長寿であったところから健康長寿のお大師さまとしても親しまれております。一方、大師による元三大師への祈傍によって四代將軍家綱公が誕生したことから、元三大師は子授け大師として広く信仰されています。

清水観音堂(国指定重要文化財)



清水観音堂は、京都東山の清水寺を模した舞台造りのお堂で、寛永八年(1631)天海大僧正により建立されました。

また、御本尊も天海僧正が清水寺より恵心僧図作の千手観音像を迎え秘仏となつています。

堂内右手の子育観音は、古くから子授けの信仰を集め、子どもが授かると丈夫に育つようと人形を奉納し供養されてきましたが、現在では家庭で愛され古くなった人形に感謝し供養する為にも多くの方々が持参されています。

観音堂の裏手には、井戸はたの「桜あぶなし」酒の酔いで有名な俳人秋色にちなんだ「秋色桜」と呼ばれる枝垂れ桜があり(写真)、その横には人形供養塔が建立されています。

不忍池辯天堂

不忍池辯天堂は、天海大僧正が水谷伊勢守勝隆の支援を得て、比叡山麓の琵琶湖竹生島になぞらえて、寛永年間に不忍池に中之島を築き、その地に建立されました。

御本尊の八臂大辯財天も、竹生島の宝蔵寺から勸請したものです。

大正時代には、伊藤忠太氏設計のもと竜宮門も建てられましたが、昭和二十年の空襲により辯天堂・竜宮門は共に焼失してしまい、昭和三十三年に現在のお堂が再建されました。

九月に行われる巳成金の日には、早朝より多くの参詣者で境内が賑わい、また右手の大黒堂では、縁日に豊太閤護持の大黒天尊前にて護摩供養を執り行い、人々の信仰を集めています。



歌川広重「東都名所 上野東叡山 全図」